

# スイーツ&メモリーズ（ 前篇）

mai-mizuki

帰り道。校門から出て、土手の下の道をまっすぐ歩いていた。

夕方、もうあたりはうす暗かったが、それでも去年の年末あたりに比べたら、日が長くなったなど実感する。もうすぐ春だ、……突き刺すような寒さはまだまだ居座っているし、ほんとに春が来るのか疑わしくさえ思うけれど、でも確実に日差しは長くなってきている。

すぐ横を走っている土手の上から、川向こうに眺める夕陽が、きらきらと温かみをもって輝く季節まであと少し、……けど、そのころには、自分はここを通ることもないんだろなあ、と、瞬間の感傷に入りこんだそのときだった。

「りよおおおっ、やっと見つけたあーっ！」

すぐ後ろから飛んできた大声にびくっと体を震わせたその直後、首のうしろにタックルをかまされてつんのめった。涼平は思わず数歩、前のめりによろけながら、後ろを振り向いたが、タックルの主が誰なのかは、もちろんとうにわかっている。

「源太……なんなの……」

「なんなのじゃねえよ、すごいひっさしぶりだろお、会うの！？今日は皆に会えるかなあって楽しみに来たのに、誰もいねえんだもん。とぼとぼと帰ってるところに、おまえを発見したってわけ！」

「……そりゃそうだろ、もう今は自由登校だし」

涼平たち三年生は、センター試験が終わった後から自由登校となっていた。図書館の勉強室が使えるので、涼平は週の半分は学校に来ていたが、学校で三年生の姿を見かけることは格段に減った。もちろん、野球部の面々に関してもしかりである。……みんなの顔を見れなくて寂しいなあ、と思うことはもちろんあるけれど、……それ以上に、受験とか受験とか、自分を取り巻いている環境がいっぱいいっぱいでそこまで気が回らない、というのも、もちろんある。

「私立受験組は本番真っ最中だしなあ、忙しいよね。……そういやおまえもそうじゃないの」

確か源太はいくつか大学を受けると言っていたはずだ。宗匡と同じ大学に行くんだと言っていたから、受かったところから、一緒に行ける大学を選ぶのだろう。

源太は顔じゅうに満面の笑みを広げ、ニイツと笑った。

「俺はね、昨日で終わったの！全部！それで今日、アイサツがてら学校に来てみたってわけ」

「あ、そっか。よかったなあ、お疲れさま。で、どうだったの？試験」

「うーん……たぶん出来たかな……よくわからんけど……受かってほしいなあ……」

涼平が試験の出来を訊いた途端、しおしおと尻すぼみに萎んだ源太に、涼平はぷっと吹き出してしまった。笑いながらその肩をばん、と叩いてやる。

「大丈夫だって、おまえなら。勉強してただろ、すごい」

「……そう？そう思う！？涼平も！」

しおれていた源太の顔が、またすぐにはあっと明るくなり、うんうん頷きながら、涼平はまた笑った。

ほんといくらくるとよく表情の変わる奴だ。現役だった頃は、こいつのこういう顔に何度もほっとした。普段の練習はもちろん、緊迫した試合中、マウンドに集まったとき、……パッと笑う源太のユニフォーム姿は、他の仲間とともに、今も脳裏に焼き付いている。

今も、何となくほっとして、体から気が抜けるような感じがするのは、こいつの天賦の才能ってやつなのかもしれない、と、何となく思った。

「……それでね？」

と、唐突に源太の声色が変わったのに驚いて、涼平は横の源太を振り向いた。

「明日は何の日でしょー？」

「え？明日？」

「2月14日と言えばあ」

「……ああ、そっか。バレンタインデーか」

正直、バレンタインデーのことなんてすっかり失念していた。

いや、わざと考えないようにしていた、というほうが正しいのかもしれない。

高一くらいまでは、毎年気にしていたと思う。毎年毎年、誰かかわいい女の子が、バレンタインデーにチョコレートをくれたら、とか、不毛にいろいろ想像しては期待して、……結局は失望して、そういう自分が嫌になって、を繰り返し、……もうそういうのはやめよう、と、思ったのだ。

やめやめ。バレンタインデーなんてお菓子メーカーの策略だ。モテる男のための日、自分なんかには関係ない、……むしろバレンタインデーなんか爆発しろ。

「なんか予定あるの、涼平？」

「ないよ。あるわけないだろ」

「なんだ。まあ、そうだろうなー」

「そうだろうなって、何だよ。……おまえこそどうなの」

源太が醸すそわそわとした空気に、何となく、突っ込んで欲しいのかと思い、話を振ってみる。案の定というべきか、源太はオーバーなリアクションで肩を竦め、洗面を作ってみせた。

「それがさあ、まだわかんないのよ。宗匡の試験、今日だったからさ、バレンタインの予定とかメールするのも悪いしって思ってた」

「宗匡？」

「夜にメールしよって思ってるんだけど。まだ試験中だろうなー、上手くいってるかなあ」

バレンタインの予定を振って、いの一番に宗匡の名前が出てくるあたりが、さすが源太だ。まあ多分、本当は最初に「バレンタインデー、一緒に過ごす女の子がいたらいいんだけど、残念ながらいらないから、宗匡と過ごそうと思って」というセリフが挟まっているんだろう。源太が一人で合点してセリフを省略しまくった挙句、意味不明になることなんかしょっちゅうだから、容易に想像がつく。

マサゲンは相変わらず健在ということか。……まあ健在じゃないわけないよな。涼平は苦笑しながら話を引き取る。

「まあ、宗匡なら明日の予定空けてくれるんじゃないの。おまえも時間あるなら、手作りのチョコとか作ってあげたら喜ぶんじゃない、宗匡も」

「ええーっ！手作りチョコ！」

源太の大声に、思わず体を引く。

「いいのかな？俺が作っても！？つか作ったことないし！」

「……まあ、いいんじゃない。作り方も検索したらすぐ出てくるよ、簡単なものもあるみたいだし。お母さんがたまに作ってるけど」

ハッ、と源太が息をのむ。何かに気付いたらしい。

「そっか、聞いてみたらいいのか！かあさんとか優子とかっ」

うんうんとひとり頷き、ぐるりとこっちを向いて「そうだよな、ほんとだよな、ありがとう涼平！」と、いきなり感謝の言葉を投げられたものだから、また嘔き出しそうになる。……別に俺、何もやってないよ？

源太は、思い立ったらいてもたってもいられなくなったらしく、早足で数歩前に出て、……ちょうどそのとき、道の突き当たりに辿り着いた。源太はここから右に曲がり、線路沿いに歩いて駅を目指すし、涼平は左に曲がって川を渡るのがいつもの帰宅ルートだ。

「そしたら、また遊ぼうぜっ、試験終わったら！あっ、頑張れよ、試験、っておまえのことだから心配してねーけど！またな！」

さっと体の向きを変えながらかけられた声、ぶんぶんと振られた手。最後、とってつけたような激励の言葉に、しかし自然と口許がゆるんだ。

「おう、ありがとう、またな！」



涼平はその夜、源太との会話を思い返ししながら、今日は珍しく野球部のやつに会ったな、と思っていたのだ。……もう次にみんなと会うのは卒業式あたりかな、とも。

だからその夜、携帯電話を揺らしたその電話、液晶に示された名前に驚いて、……何だって今日に限っていっぱい連絡来るんだろう？と思ったのだ。……でも、よく考えたら、その日に連絡が来る理由はひとつしかなかった。

「……バレンタイン限定？」

「そう」

翌日。

涼平の目の前で大きく首を振り、深く頷いたのは壱成だ。……頼れるキャプテンだった壱成の、見る人を思わず納得させてしまうようなその仕草は、しかし、いつもの見慣れたグラウンドや部室ではなく、ざわざわと人だかりが絶えない午後の店内では、心なしか上滑りしているようにも思える。

……いや、上滑っているのは、店内に所狭しと並ぶスイーツを前にした壱成のほうか。

「今日まで、チョコファンがバレンタイン仕様になるって聞いてな、ちょっと、どうしても、見てみたくてな……」

「ちょこふあん？」

「チョコレートファウンテン。チョコレートが噴水みたいに流れる奴、あるだろ」

「……ああー……」

こんな、甘いものとは無縁そうな大男の口から、チョコファンなんていう用語が飛び出してくるのがまず、だいぶキテレツな光景だったが、壱成のチョコ好き、甘味好きが相当の域なのもよく知っている。実際、去年の秋口にここ、スイーツバイキングの店に来てからというもの、壱成は何かと理由をつけてはちょこちょこ通っている。そのたびに声がかかる涼平も、何度か付き合

っているから、もうすっかり見慣れた店内だ。

昨日の夜に電話をもらい「明日行かないか」という急なお誘いにオッケーしたのは、まあ別に勉強以外に用事はないし、息抜きにいいか、と思ったこともあるが、……もう、高校を卒業したら、壱成とここに来ることも、なくなるかもしれないしな……、というセンチメントが、多分に入っていたことも、いなめない。

予約していたという席に案内されて座りながら、壱成が「ほら」とそのチョコファンのほうを指差す。確かにいつもそこに置いてある、三段くらいのでかいウエディングケーキみたいなやつ、甘い香りを放ちながらてっぺんから下まで流れ落ちている焦げ茶色の液体は、今日はまっピンクに染まっていた。……バレンタイン仕様って、つまりストロベリーチョコになってるのかよ、甘すぎだろあれは……。

「うわー、あれは凄い。甘そうだな」

壱成と反対側の隣で声を漏らしたのは、保だ。

今日、誰誰が来るとは知らされていなかった涼平は、壱成の隣に保がいるのに驚いていた。一番、ここに居る確率が低そうだからだ。保が難関大学に合格するべく、必死で受験勉強をしているのはよく知っていたし、保も目指している国公立の大学は、あと少しで試験日である。

「涼平、どんな感じ？」

保に問われたのは、言わずもがな、試験のことである。

「うーん、まあ勉強はしてるけど、どうかな」

涼平も国公立を受けることにしていた。……もし合格できたら行きたい、とひそかに思っている大学だ。正直、自分の学力では難しいのかもしれないが、やるだけはやろう、と思って勉強に打ち込んでいた。

「保は？順調？……今日は来てないと思ってたから、びっくりした」

「うーん、どうだろう。まあここまできたら、あんまり根をつめるのもと思って。一度来てみたかったし、ここ、壱成がいつもうまいって騒いでるから」

それから、と保は思い出したように付け加えた。

「みんなとこういうところ行くのも、これから減っていくのかなー、とか思ったらさ」

その言葉に、どこか詰まる。……涼平も同じことを考えていたからだ。

受験のことでいっぱい、あまり考える余裕もないけれど、もう少しで自分たちは卒業だ。卒業したら、当たり前だけど皆離れ離れになってしまう。……仕方がない、どうしようもないことなのに、妙に自分のどこかを攻撃し続ける、何か。

「そうだな」

いろいろ、胸がいっぱいになって、短くそれだけ返したときだった。

「はい、持ってきたよお！」

大声とともに、ドン！と目の前に置かれる皿。山のように盛られたとりどりの食べ物は、しかしその殆どが茶色に塗りつぶされている。スイーツではない、焼きそばとか唐揚げといった食べ物だ。その向こうに見える満面の笑顔に、思わず涼平は嘔き出した。

「おまえ、いつもそれなのな、……つうか何でおまえがここにいるわけ？久美ちゃんは？バレンタインだろ、今日」

涼平こそ、今日こんなところにはいけないはずなのに。久美という可愛い彼女と、文字通りチョコのように甘い一日をすごさなければならないはずだろう！？  
涼平の向かい側に座った孝介は、え？と眼をまるくして、

「久美とは昼飯一緒に食べたよー、さっき」

「……昼飯って、デートとかしないわけ？お前」

「……それで、これからカレー食うの？お前」

「もちろん。お腹すいたもん。それでその後デザートね！」

相変わらずの天然マイペースぶり、孝介節全開である。……きっと久美も、笑いながら孝介をここに送り出してくれたのだろう。

何それ、すごいな、と保が笑い出したあたりで、早速ケーキを取りに行っていた壱成が戻ってくる。その皿に山と盛られたケーキを見てまた笑い、交代で保と涼平が食べ物を取りに席を立った。

とりあえず、と入口近くに並べられたドリンクコーナーで、飲み物を選んでいたとき、慌ただしく店に入って来た人影があった。

「あっ、涼平、保！ごめん、遅くなった」

見れば、申し訳なさそうに体の前で手刀をきっているのは勝利だ。

「お、勝利じゃん。遅刻チコク」

「もー、ほんっとごめん」

勝利はまっすぐ二人のいたドリンクコーナーまでやってくると、空のコップを手に取り、冷えたウーロン茶を注いでそのまま一気飲みした。……どうやらよほど急いでいたらしい。

「どうしたの、珍しいな、遅刻なんて」

「うん、ちょっと、買い物してたらさー……」

見れば勝利は、手に紙袋を提げている。上から覗くと、なにやらきれいにラッピングされた包みが見えた。

「なに、プレゼント？」

何気なく問うた涼平の言葉に、しかし勝利は傍からみてもはっきりと狼狽した。……うわ、聞いちゃマズかったか、と涼平が一瞬後悔したほどだ。

「え、いや、これは……」

「なんだよ、このあとデートとか？今日バレンタインだもんな」

「う、や、そういうんじゃない、んだけど」

保の軽口なんか、普段なら何でもなくいなせるはずなのに、勝利の顔は文字通り茹でダコみたいに真っ赤だ。眉を下げ、その困り切った表情が見事にわかりやすい。

「なーんだ、おまえ彼女できたの？いいなあ」

「いやっ、違うっ、」

思わず突っ込んでしまった涼平の言葉を、やけにきっぱりと否定してから、勝利ははたと気付いたふうで尻ポケットの携帯を引っ張り出した。着信がきたのだろう、急いで店の外に出て行く。慌てふためくようすが実に勝利らしくて、保と二人で顔を見合わせて笑ってしまった。

とりあえず最初ということで、目についたスイーツを選んで席に戻ると、壱成と孝介の二人は、もうその皿に盛られたものを相当量食べているのにまた驚く。

「はやっ！」

「そう？別に普通だよー」

「いや、早いでしょ、……これ、店的に赤字だろうなあー……」

「なあなあ、これで全員？他のやつらは？」



保の同情に満ちた呟きも全く聞かず、孝介が忝成に大声で問いかける。その言葉に、涼平はそうそう、と口を開いた。

「さっき勝利が来たよ、今電話してるみたいで、すぐ来ると思うよ。……それから、昨日源太に会ったけど、マサゲンは今頃デート中のはず」

「デート？さっすがー」

なにが「さっすが」なのか、わかるようなわからないような、……面白そうな涼平の口調に思いきり乗っかって、孝介は実に楽しそうだ。つられて笑いながら、忝成があとを引き取る。喋りながらもケーキを口に運ぶそのペースは全く落ちていないのが凄いところである。

「琢磨は用事があるらしい。……まあ、あいつは予定詰まってそうだよな」

「富士急ハイランドに行くって言ってたよ」

「えっ？」

保が言葉を挟んだのだ。思わぬところから出てきた情報に、涼平は眼を丸くした。保は面白そうに続ける。

「彼女に連れていかれるんだってぼやいてたけど、案外楽しみなんじゃないの、あいつも」

「富士急かー！お化け屋敷が怖いんだろおー、俺は遠慮したいなあ」

「……あとは、裕も行かないって言ってたけど、……なんかあいつ、昨日電話口で、いつもと違ったんだよな、……元気なさそうだったんだよなあ」

忝成は昨日のことを思い出したのか、心配そうにその表情を曇らせる。

「裕也が？珍しい、なんかあったのかな」

いつも飄々としてマイペースな裕也が、忝成をして「元気なさそう」と言わしめるなんて、相当珍しいんじゃないだろうか。……と、孝介が考え込むそぶり、うーん、と唸った。

「そうねえ、失恋とか？意外にそういうのこたえるタイプだったりして？……まあ、山あり谷ありだもんねえ、人生」

「……おまえに言われたくないけどな……！」

噴き出しそうになるのをぐっと堪えたのは涼平だけではないはずで、あはは、と堪え切れずに声に出して笑い、……また、すうっとどこかが晴れるような感覚。……今日ここに来るのは、試

験前だし少し迷ったけど、来てよかった、と心から思える。

やがて勝利も合流してきて、ひとしきり飲み食いと会話に興じる。あっという間に時間がすぎ、窓からの景色が薄暗くなってきたな……と気付いたあたりで、おもむろに保が携帯を取り出した。

「俺、もうちょっとしたら先行くな、これから予備校あるから、宮内が迎えに来てくれることになってて。……あ、もう来てるっぽいな」

「宮内くん！？一緒に食べたら？」

孝介の大声が聞こえているのか、保は立ち上がり「ちょっと行ってくるわ」と言いおいて、店の入り口のほうに歩いていく。入り口あたりにひょこっと顔を出した宮内と何事か喋り、保がこちらのテーブルを指差した。こっちに来ないか、という話だと思うのだけど、宮内が遠慮しているのか、慌てたように手を振っているのが見える。

やがて席に戻ってきた保が「あんまり時間ないみたいだから、もう行くわ。そしたら」と、鞆を掴んだ。

「じゃあね、……次は卒業式かな。

またな」

軽く右手を持ち上げて、踵を返すその背中に向かって、孝介がぶんぶんと大きく手を振る。

「またねえー、保、宮内くんも！」

入り口まで届けとばかりに張りあげられた声に、近くに座っている客がちらちらと視線を投げる。孝介はまったく頓着せずに手を振り続け、宮内も気付いたのか、右手を胸のあたりまで持ち上げて応えるのが見えた。

二人の背中が消えていった入り口を眺めながら、「次は卒業式かな」と保が言ったその言葉を、涼平は知らず噛みしめていた。……そうだ、もう、こいつらと会えるのは、卒業式くらいなんだ……。

と、……視線を向け続けていたその入り口から、サッと視界に入り込んできたそのシルエットと、その顔に、涼平は息が止まるほど驚いた。

「あっれー？」

孝介がぼかんとした声をあげる。ずんずんと一行の座っているテーブルまで来て、篤史は「ちわっす」と口許を綻ばせ、頭を下げた。

「なんでここがわかったの？偶然？つか座れば？一緒に食べよう」

孝介の言葉に、篤史は恐縮したふうで頭をさげる。篤史の後ろにいる山田も同じような反応だ。

「今朝、壺成さんに聞きました。すみません、ご一緒したいんですけど、すぐ帰らなきゃいけないので」

篤史の言葉に、……じゃあなんでここまで来たの？……という雰囲気の流れ、孝介がそれを口にする一瞬前、篤史は体の向きを変えた。

「涼平さん」

「え？」

「これ、どうぞ。よかったら貰ってください」

唐突に名前を呼ばれ、素っ頓狂な言葉を返した涼平の目の前に、もう鞆から出して準備していたのだろう、ラッピングされた四角い箱をずいと突きだされ、ほぼ反射的に受け取る。

「俺から、激励の品です。試験頑張ってください」

「えー、なに？もしかしてバレンタインのチョコ！？」

「やるねえ、お熱いねえお二人さん！」

ここぞとばかりに騒ぎ出した孝介と勝利に、……内心ぎくっと体を固めながら、何とか笑みを作る。

「あ、……ありがとう、わざわざ、気遣ってもらっちゃって」

「もー、涼平さん、コイツ大変だったんすよ、こないだの休みにチョコ、デパートに買いに行って。このデカイ体が女子の中で浮くわ浮くわ、本人はすげー熱心だし」

「だって、ちゃんと選ばないとだろ」

「ハハッ、涼平さんへの愛はホンモノだよなあ！」

なんとか笑顔をやささないよう、表情筋を固めながら、背中がじりじりと冷たくなっていくのを感じていた。

こいつらは何も考えてない、ただ面白くてからかってるだけだけど、言葉に他意はないけど、……でもそれらが、意図されたものとは全く違う意味をもって、涼平に降りかかってくる。今篤史が自分にくれたものには、多分、……きっと、自分にしかわからない、重みが乗っているはずだからだった。……特別な意味がこめられているんだろうって、わかったのだ。

「……応援してます、涼平さん」

篤史は静かな、柔らかな声音でそう言うと、ふいと孝介のほうを振り返った。

「先輩方の分ももちろんあります、俺と山田から！」

「えっ、やった！」

「おお、すごいな」

「でも涼平の二の次かよー、なんか面白くないなー」

「まあまあ、勝利さん、篤史の涼平さん愛は不可侵領域ですよ！先輩方の分、俺が選んだんですよ、うまそうなのを厳選しましたからっ」

楽しそうに騒ぐ仲間たち、……涼平も一緒になって笑いながら、どこか、ときどきと音をたて続ける鼓動に意識を向けていた。

もらってしまった。

バレンタインのチョコ、生まれて初めて、……ずっと心で思い描いていた、ぼんやりとしたシチュエーションとは全くかけ離れた形で、……でも初めて、特別な気持ちがこもっているもの。

手に持ったままだったその箱が、急に重みを持ったような気がして、涼平は思わず息を止め、それから慌てて唾を飲み込み、……そっと、その箱を鞆にしまった。

(後篇につづく)